

平成 27 年 11 月 21 日 草泊り座談会 「小国高校の魅力化について」

※座談会の内容を編集して記載します。

<自己紹介と、小国高校への思い、期待することなど>

室原正英氏（以下室原） 先だつての臨時総会で、「存続をさせるための連絡協議会」が「小国高校の魅力化と永遠の発展の会」に改称されました。発展するために魅力化をどうするか、具体的にどういうことをやるか、ということが今後の課題であると思います。

また、現実を見ると、生徒数が非常に少なく、両町合わせての生徒数の確保を 55%、少なくとも 50%にするとなんとか入学生が 40 名を越します。魅力化だけを追求すると足元が揺らぎますので、生徒数の確保と両輪でいくこと、またそのあたりのご協力を育志会の方々に是非お願いしたいと思っております。

岩下伸良氏（以下岩下） 今回年度途中での（同窓会）会長交代、ということで、役員も大幅に入れ替えをして創立 100 周年に向けて山積している大きな課題の数々に取り組んでいきたいと思っています。

今の同窓会の立場で、何ができるのか。7 年後に迫った 100 周年という大きな行事に向けて、改めて基盤づくりをしていかなければならない時期にきているというふうに思っています。ご協力いただける皆様方にお知恵をいただきながら、また、発展の会とも、育志会とも協力しながら、学校の行事などにも同窓会ならではの参加をして、学校とも関わりあっていきたいという風に考えております。

北村栄次朗氏（以下北村） 今回会長職をいただくにあたってこれまで両町で交互に出していた会長職を今回初めて変更するという事で、育志会自体には 2 年しか在籍がないのですが、これはひとつ自分の勉強のため、高校のことを知るため、と思ってお引き受けしました。在籍が一年足りない分、これからも勉強しなきゃいけないのかな、という思いでここまでやらせていただいています。

また、私自身、自分の地元に高校があることから、「地域に根ざせる高校づくり」に一役買えないだろうかと思っていたところ、「発展の会」への名称変更、また同窓会の会長交代と、色んなものが動き出したことを実感しています。今年（娘が）卒業しても、何らかの形で関わりたいと思っておりますし、任期を全うしたいと思っております。よろしく願いします。

福島也寸志氏（以下校長） 僕は教員生活の3分の1以上はこの小国高校です。あと残された時間は2年とちょっとですけど、自分を教員として育ててくれた学校でもありますし、小国高校のために、出来る限りいろいろやっていこうと思っています。

今年は「存続をさせる会」も名称変更になり、同窓会も岩下会長のもと、新たな出発を迎えて、小国高校を支える体制は今年出来上がったと思っています。育志会を含め3つの団体で小国高校を見守っていただきたい。

また、来年度は校内改革をしようと思っています。現在最大限忙しくしている先生方の負担軽減を図りながら、尚且つ両町にとって「小国高校が必要なんだ」と言われるような活動を考えていこうと思っています。その際には色々ご協力をお願いすると思いますけど、よろしくお願いしますと思います。

＜小国高校の現状と良さ、改善点等について＞

室原 僕は（小国高校を）卒業してもう60年になります。その間、高校の各団体の長を全てやってきました。その中で、生徒が非常に荒れ、「このままでは（高校が）地域から見離されてしまう」と思うような不安な時期がありました。ちょうどその頃「教育振興懇話会」という組織を立ち上げておりましたので、『将来生徒減という危機に直面することが予想されるので、今、危機感を持って対応せんといかん』というような進言をしたりして取り組んできました。保護者会でも危機感が強まり「育志会」というように名称を変えまして、先生たちの頑張りもあり、その後非常に生徒の態度も良くなりました。

＜中略＞また、小国町がホッケーを誘致してくれたことは良い起爆剤になったと思います。特に一期生は明大や早稲田にも進学しました。「夢を叶えられるんだ」「そういうチャンスが自分たちにも来るんだ」という希望を非常に与えたと思います。そういう意味では発展の会が現時点でも生徒、あるいは保護者に夢を持ってもらうような対策、目標を示していくことが役割ではないかと思っています。

岩下 本当に現在生徒数も少なくなり、さっき（室原）会長がおっしゃられた学校が荒れた時期というのも私はよく認識していますけれども、あの（荒れた）時期を乗り越えてきた、良くなってきたというのはやはり地域だったり、学校の取り組みだったり、保護者の考えであったり、周りが団結してきたからこそ、環境も良くなってきたのかな、とも思います。

また、よその子どもでも自分の子どもと同じようにものを言う、いかに地域が自分たちの地域の子どもたちと関心を持って接するかということも大切であると思っています。

また、地域だったり、保護者だったり、子どもたちに携わる人達が「小国高校にはこんないいところがあるよ」ということをもっと口に出していいし、今進学を控えた子どもさんを抱えている保護者の皆さんに周りが訴えていくことをしていかないといかんなあ、と思っているところです。

北村 実際に子どもを通わせている保護者の立場としましては、ま、これは笑い話にしているんですけど、家では挨拶をしない子どもが学校では自分の父親を見て「こんにちは」という。これは紛れも無く、子どもにとっての学校、という生活のあり方のスタンスです。

また、今日はクロスカントリー大会だったんですけど、今日一日僕が見ていて感じたのは、一人ひとりの芯の強さ、というんでしょうか、僕らの頃のひと学年分の人数しかいないんだけれども、少人数でも一人ひとりがしっかりしている。僕は（在籍時）荒れた時代の最後の方だったと思うんですけど、僕らの時代に（そういう芯の強さが）あったかなあ〜？と。なんていうか、人数が少ないからこそしっかり子どもたちが学んでいっているのかな、と。

親の立場から言えば、挨拶にしてもなんにしても家庭では見られない子どもたちの行動は、地域性を活かした学び舎の中での出来事もしっかりしていて、随所に現れてくるのかな、と感じています。僕らの頃にはなかったものが、彼らにはしっかり備わっているのかな、という気がしています。

福島 そうですね、実際子どもたちは頑張っていると思いますね。僕は一番ひどかった頃から10年間ほどずっと見てきましたけれども、当時の子たちは当時の子たちでいいところがあったし、4年前久しぶりに帰ってきた時に思ったのは、あのとき荒れていた子どもたちが中心になって、小国郷を支えている。そういう風に育っているというのはやはりあの（荒れた）時代があったから自分たちは頑張れるんだ、という思いがあるんだろうと思います。

今の状況というのは、可哀想な反面、得をしているという両面があります。得をしているというのはやはり、北村会長もおっしゃいましたが、少人数ということですね。市内だと1対40ですが、ここでは最大でも1対25。授業も（習熟度別に）分割していて、それが毎日できる。その結果がやはり子どもたちの成長につながっていているんだと思います。

<中略>ちょっと可愛そうなのは、数が少ない分競争意識がどうしても（足りない）。これは昔からですが、この独特な地域に育っていますから、外との競争が少ない中で、どう工夫していくかというのはこれからの課題になっていくと思います。今でも機会があれば外へ連れて行き、他校の生徒たちを見て、（小国の子どもたちが）刺激を受けて次につなげ

ていく。そういった感じですね。

＜小国高校を魅力的にするために、そして今後も残していくために＞

室原 「残していく」んではなくて、「残さなければいけない」んですよ。これはもう大前提で。そのための魅力化。魅力化というのはやはり『人を惹きつける力』だと思うんですね。だから、全体として、協議会として、発展の会として、どういうことをやればみんなを惹きつけられるかが、非常に大きな課題なんですよ。

＜中略＞福島（校長）先生が「刺激を与える」と言われたように、今の小国の子どもたちも来年度台湾に海外研修ということで提案をしておりますけれども、井の中の蛙でおるよりも刺激を受けることはいいことだと思っているんですよ。そして、親も子どももできるだけ早く、進学か就職か、進学であれば国公立、私学、それとも専門学校なのか、就職を希望するのであればどういう方向にいくのか、そういったことを高校に入った時点で持っていていただくと先生方もやりやすいし…また、毎年取っているアンケートをもう一度原点に戻ってみて、親御さんたちや地域の人たちが期待している部分を見るべきかな、というふうに思います。

岩下 最初は「小国高校に行く」と子どもが思っていたとしても周囲が他の学校を進めるという影響も大きいのではないかと思います。そして、校長先生もおっしゃられていましたが、学生時代にちょっとしたやんちゃをする経験も必要なのかな、とも感じます。

同窓会としては、（室原）会長とも話をしていたんですけども、地域全体で（同窓会を）広めて、あちこちに小国高校に関係する人がいる（という状態を作りたい）。

＜中略＞地域全体を巻き込んで（同窓会の運営を）やっていけたら意識も変わってくるのではないかな、と。自分が高校卒業以来一度も足を運んでいなかったり、子どもが一人も小国高校に進学していなかったとしても、自分が卒業生であるならば少しでも気軽に足を運べるような形をとったほうがいいのではないかと。

北村 そうですね。（小国高校を）今後も残していくために、というスタンスで言えば、高校と、行政と、地域とが絡みあって小国高校の根っこを深くしていけば、いろんな局面がきても解決の窓口が広がるのではないかという気がしているんですね。

今年やった文化祭でも、最大のテーマは「小国高校をみてもらおう」「気軽に地域の方に足を運んでもらおう」ということでした。

小国高校が魅力的になる、ということは街全体が魅力的になるのと一緒にだからですね。（そういう意味では）一心同体だと思いますね。高校だけでなく、大きな視野で見ていったほうが確かだと思います。

室原 幹事会や後援会あたりでも常に意見が出るのは、自治体（小国町・南小国町）が小国郷をどうするのか、といったことなんです。少子化を止めて、今いる子どもたちのためには何をするか、ということですね。

小国郷が発展、魅力化すれば小国高校の存続、発展というのは問題解決するんです。ですから、もちろん高校側にも一所懸命取り組んでいただかないといけないけれども、高校単体だけでは限度があるわけです。やはり、小国郷という郷土に魅力があって移ってこられる方とか、そういった人を発掘していく必要があるし、両町長さん（魅力化の会会長・副会長）がどういう策を持っておられるかを私たちも知りたいところですね。

～保護者からしてみれば先生方には本当に良くしていただいていると思っているが、現在小中学校にお子さんを通わせている保護者にそこがしっかり伝わっていないような気もするので、そこを伝えていくのは現在高校に子どもを通わせている保護者の役目であるようにも思うが～

室原 毎年両町の中学校には（進学先に選んでもらうよう）お願いをしているが、できるだけ早い時期にお願いをしに行きたいと思っております。今の時期になってしまうと、だいたい進路は決まっていますので。

福島 （小国）高校が残っていくためには数字的にははっきりしています。（生徒数）41名以上。ただ、高校が活性化していくためには（一学年）50名を切るとかなり厳しくなります。現状の子どもたちを見ていると、全校生徒が一人一つ何かやっていて、そうしてもらわないと学校が回っていかない状態なんです。ですから、一学年50名の入学が毎年あれば、僕は小国高校はずっと残ると思っています。

では、それだけの数をどう確保するか。室原さんをはじめとするみなさんの取り組みのおかげで学校としても色んな取り組みができ、成果も出しているんだけど、宣伝力が足りない。小中学校の保護者に上手く伝わっていない部分もあります。

これから数年の目標は小国高校でやっていることをどんどん広報で広めていくことですね。

育志会と同窓会の連携。そして、メディアの有効活用。この 2 つが出来上がっていくとかなり宣伝できるのではないかと思います。

岩下 総会とは別に、小国郷にいる期別の幹事をピックアップして期別幹事の会合を開くことと、定期的に同窓会の会合を開いていくことが急務ですね。

北村 私は育志会に在籍が 2 年しかありませんでしたので、実感として思うのはじっくり育志会と向き合える人選が必要かと。単年度の会長、つまり単 P 制度の息苦しさは感じています。複数年というのも大変なことだとは思いますが。ただ、今、全てが大きく動き出した、そのことを来年以降につなげていかなければいけない、というような使命感を感じています。＜中略＞同窓会、育志会、魅力化の会、三位一体でスムーズに流れていく潤滑油のような役割が求められているのではないかと思います。

福島 例えば、今僕がやりたいのは、魅力化の会と、育志会と、同窓会の 3 つが共同して、何か（行事を）合同でできるような取り組みができないかな～、と思っているんです。

＜中略＞この地域に高校がある。その存在意義というのは「高校は町（境）を超えている」んですよね。両町をつなぐ、という意味では本当に今一番役に立つ。高校を中心に人を集めると、ひとつの地域になれるんです。＜中略＞将来的には、大きな話になるけれども、小国高校が核になって 2 つの町を結びつけるような、そんな取り組みをやっていきたいですね。

室原 是非それはやっていかないと。そして、それをやろうとするときには多分この発展の会が一番中心になってやれるんですよね。＜中略＞学校にひとつお願いがあるんですが、もう少し地域に施設を開放して、学校に関わりのある人達が気軽に顔を出せるような、そういう雰囲気を作っていただけるといいですね。

岩下 とにかく学校に足を運んでもらう、その形を取るのが一番だと思います。

室原 育志会の方々にも、「魅力化について、何がいいのか」という知恵をぜひお借りしたいと思っています。

～同席していた菅村教頭先生にもお話を伺いました～

去年初めて小国高校に赴任されて、どんな印象を持ったか

菅村 存続の会自体は知っていたんですけども（前任校は阿蘇中央高校）、ここに来て初

めて、実際の活動や両町との深い関わりを初めて知りました。一年間この会に携わらせていただいて、改めて学校に対して密接に関わっていただいていること、地域に根ざした高校づくりのために周りの方々からご支援いただいているということもわかりました。

小国校生については、赴任した当初、すごく純朴で、地域性というのが本当に子供さんの性格に現れているな、というのが第一印象でした。ただ、学校規模が小さいこともあると思いますが、もうちょっと元気がほしいな、というのも同時に感じたところです。

＜会の終わりに＞

室原 魅力化について、何がいいのか、という知恵を育志会の方にもお借りしたいと思うんです。

本当に難しいんですよね、『人を惹きつける』というような力、学校に引き付ける力とは何か。

ただ国公立に合格するだけでもない、結局教育というのは人間形成の場ですので、そちらが置き去りになってもいけないし、両方なくてはならないですから、頭でっかちになってもいけないし。その辺りを考えていきたいですね。

福島 魅力化については4年前から室原会長に投げかけられていまして。僕にもまだ、それはわからない。ただ、ひとつできるのは、魅力化の会や同窓会、育志会の皆さんが他の人に「小国高校はこぎゃんよかところがあるとばい！」と宣伝できるような取り組みをまず、作る。そして、僕らはそこで学校の良さ、子どもたちの良さを見せていく。＜中略＞

今の小国校生は、（一番荒れていた時代の子どもたちよりも）自分の将来について真剣に考えている。そして、高校を卒業するとき自分はどうなりたいか、ということに対しても取り組もうとしている。

彼らは確かに、競争心は市内の子どもたちに比べるとないかもしれない。勉強の学習量も市内の子どもに比べると少ないけれども、高校生としての活動を、総合的な活動を見ると、小国高校の生徒は市内の高校に絶対負けとらん。これだけ一人の子が活動できる場所がここにある。ボランティア活動一つとっても、延べ180（人）ですよ。＜中略＞延べ人数で全校生徒の数を遥かに超えた地域活動をやっている。僕はそれだけでも自慢できる学校だと思っています。

来年度やりたいな、と思っていることもあります<中略>。その時は是非みなさんのご協力をよろしくお願いします。(了)

開催日 平成 27 年 11 月 21 日（土曜日）午後 4 時～

開催場所 小国高校校長室

出席者 室原 正英氏（小国高校の魅力化と永遠の発展の会 幹事会会長）

岩下 伸良氏（小国高校同窓会 ますみ会 会長）

福島也寸志氏（小国高校 校長）

北村栄次朗氏（小国高校育志会 会長）

同席者 菅村 文武氏（小国高校 教頭） 川口雄也 （小国高校 写真担当）

佐藤美穂子 （聞き手・小国高校育志会 広報委員長）

編集責任者 佐藤美穂子

※最後までお読みいただきありがとうございました。今回の座談会に際しご協力いただいた皆様方に心から感謝申し上げます。